

生産技術特集によせて

専務取締役 小松 周吉

Syuuichi Komatsu

製品が開発・設計段階を経て、生産ラインに流れ出してから原価低減対策は、5～15%程度しか望めません。すなわち、開発・設計段階で、ほとんどの内容が決まってしまうということは、多くの書籍・資料で知ることができるし、社内における具体例からも、よく認識できることでもあります。

さて、物造りの現場では、人・物・設備・エネルギーの4要素を最少のコストで考えて、最大の価値を生ませることを目標とすべきですが、この内容に大きくかかわっているのが、生産技術者であると言えます。生産技術者の使命は何だろうかと考えたときに、上記4つの生産要素をどのように組合わせたら、効率の良い、バランスのとれた生産ラインを作ることができるかということに腐心しなければなりません。なお、投資コストという面で考えたときに、作業環境に対する安全コストは、上記4要素とは次元が違う管理であることを認識しておく必要があります。

生産技術者として大切なことは、自分が担当している製品について良く勉強し、製品はどんな機能をもっているのか、どんな使われ方をするのかなど、製品機能を知ることと、製品をどのように作っているのか、またどのように作ったらよいかという、製造面での固有技術を知っていることです。言うならば、固有技術によって、製品の改善は大きく進められることを忘れてはなりません。

固有技術に対しては管理技術があり、車の両輪ということになります。管理技術(例えば、ISO9001やISO 9002の認証取得による管理)を備えた上に、長い間の生産技術のノウハウの積み上げと、製品固有の機能・品質をよく理解した固有技術、そして製品を作るための固有技術を、さらに高めることがより大切であることは認識いただけると思います。

さらに冒頭述べましたような理由から、製品の開発・設計段階から「価格から発想した製品の設計」に生産技術者は、深くかかわる必要があることは当然であります。世の中の生産技術の動向を探り、井の中の蛙になることなく、絶えず従来技術そして新技術の見直しと、自らの実行・経験を大切に考え、実際に手を動かし(汚し)、苦勞をすることにより、抽象的・総論ではない斬新な考えが生まれてくると信じます。

つね日頃、生産技術の皆さん方には、「…のはずである」ということではなく、あくまでも現物・現実・現場を直視する行動家になって貰いたいと熱望しながら、泥臭い具体論が製品を強くすると信じて、今後ともお客様の潜在的なニーズを喚起し、期待を満足させる高品質の製品を供給するよう要請をしていきます。

SANYO DENKI

Technical Report No.2

Nov. 1996